虚栄と信仰

歴史の未来についての諸観念

Aldo Poblete Varas

Ⅰ．カシオペイア、あるいは生成することの不能

人間のなかには、ある種の行為へと向かう傾向が存在する。人間自身の本性から発する傾向である。本性とは、実践を通じて、時間を通じた行いによって定着するものだ。本性とは、根本的には反復である。ある種の行為を行う傾向は、種のあらゆる成員によって経験され、意識が初めてわれわれから湧き上がって以来、そうあり続けてきた。これらの傾向はまた、人間の大きな集合体においても経験され、したがって観察可能である。小さな、あるいは最小の尺度で起こることは、より大きな次元でも起こる。

これらの傾向は、あったものはあり続ける、とわれわれに語ろうとしているように見える。もちろん同じ形では起こらないという脚注を、つねに伴いながら。様態は変わり、内容は持続する。民の発展において、これらの傾向は、その軛の下で生き増え広がる者たちを苦しめ、あるいは強める神話と重荷へと変成される。経験そのものによってであれ、そのあとに来る理論的な精緻化によってであれ、一般に見過ごされるのは、傾向はある重みの産物だということだ。その重みは、ほとんど定義上、過程へと浸透し、あらゆる瞬間が前提とする流動性が、何らかの理由によって、けっして展開するに至らないようにする。

われわれが歴史と呼ぶものには傾向があり、それらは進歩の観念を絶えず脅かす。遅かれ早かれ、物事は元の水路へと戻るのではないかという疑念が、つねに残るからだ。歴史には大きな方向があり、その方向は傾向を通じて自らを表す。このすべての問題の一部は、これらの傾向が、ある悲劇的な雰囲気、すべてが結局は破滅と絶滅へ至るという一種の感情によって味つけされがちであることにある。そのような傾向に

は多くの自己愛が含まれている。そうした形の傾向は、それらに最初に存在を与えた者たちの影響を受けすぎているからだ。それらを世界へもたらした存在の天才と惨めさが、そこにはあふれている。

人間の行程は、現実的なものを鍛え上げる者たちの美的な芳香によって、気候を整えられている。行為によって、あるいは行為の欠如によって、俗人にはつねに不確定なものとして現れる運命の、不吉な路地へと大衆を導く者たちの芳香によって。この道程全体を通じて権力が自らに染み込ませることに成功した特性の一つに、完璧さが入らないのは明らかだ。だがそれは、些細な点にすぎない。ここで語っているのは、巨大なヴィジョンである。これまで考えられたことのない領域や世界、あるいは考えられたとしても、ごく周縁的かつ断片的にしか考えられてこなかった領域や世界を包含するヴィジョン。優れた感受性を持つ存在の介入によって可能となるもの。その存在たちは、課題の計り知れない重さゆえに、それを遂行するなかで破壊される傾向があった。

傾向が重要なのは、あるものはある、とわれわれに示すからだ。このことから、存在しない中心という観念は意味をなさず、前進するすべてが自分自身の夢に囚われていることが明らかになる。

Ⅱ．周縁的な観念への開かれ

では、それは何にかかわるのか。おそらく、これに答える唯一の方法、より正確には、これらの力がどのように作用するかについて、何らかの手掛かりをもたらす唯一の方法は、二つの観念を受け入れることにある。第一に、恣意的なものがわれわれを人間として構成していること。第二に、恣意的なものは意志ではなく、服従と同義であること。

支配の起源が知られていなくても、服従することは可能か。答えを出すには、問いの立て方が誤っていると言わねばならない。その問いは、支配の起源をわれわれが知らないこと、われわれの実存にその意志を押しつけるものを知らないことを、前提としているからだ。だが、そうではない。われわれの実存を導くもの、すなわち傾向を、われわれは非常によく知っている。それにもかかわらず、諸世界で起こることが大きな運動の結果だという考えを持つことは、必ずしも知識を意味せず、その動態にかか

わりを持つことなど、なおさら意味しない。どうしてそうなりえようか。二十世紀がわれわれに示したのは、確信の蓄積の論理的な帰結だった。そしてそのいずれも合流せず、実際には相互に矛盾していた。

ここでの鍵は、その矛盾が実のところまったく矛盾ではなく、単に視点の問題だったと認めることだ。人間であるわれわれは、自らの主観性と、そこに内在する苦痛が、多少とも定まった道徳秩序の還元不能な徴であるという考えに、きわめて弱い。だが、それは明らかに非常に危険なことだ。われわれにとって異質であり、われわれを不要とし、実際には傾向を構造的に濁らせ、あるいは妨げる要素としてわれわれを捉える過程を、構想するのは非常に難しい。その観察の仕方、その物事の理解の仕方は、あまりに低い高度に自らを置いた者にのみ固有のものだ。

ここで重要なのは、傾向を観察できることである。それは非常に重要だ。だがなお重要なのは、大きな傾向を観察できることだ。川の支流のように、他のすべての傾向が最終的に合流する傾向。すべてを統合し、そのすべてから、量的に異なるだけでなく、質的に異なる何かを作り出せる傾向を。

われわれの概念の限界もまた受け入れねばならない。言葉と不完全さに満ちたそれらは、小さな傾向の内に住まうとは何を意味するのか、その獰猛な実例である。われわれにはいまだ、異なる水準で作動するための道具がない。だが、それは時間の問題にすぎない。科学はそれを最終目標にしている。科学界の一部が、自らはある行動の自由を享受していると信じ、あるいは、ただ現象の混沌とした出現によってのみ導かれているという、確かに幼稚な観念を抱いているとしても。

これは、根本的に一つのことをわれわれに告げる瞬間だ。自らの位置を定め、側を選び、対立する陣営のあいだの可能な交わりに関するいかなる観念も捨て去らねばならない。われわれはいま、武器を見せず、自らを隠し、暗い森に似た何かがまだ残っていることを利用し、攻撃の時が来るまで身をかがめて待つことが、もっとも重要な瞬間にいる。

III. 生は嘘である

神話に満ち、英雄に満ち、先人たちの災厄に満ち、教育と沈黙の力によって課された雰囲気に、完全に溺れている。いまわれわれは、古い城をさまよい、新しい客を怯えさせる、首を落とされた王子のように、あれほど執拗にわれわれのために定義され、これまでごく少数しかまともに理論化できていない、あの人間性の何かを取り戻そうとする。これだけの肉では足りなかったのか。

われわれはいま科学の時代にいる。狂信者と禁欲者の道具たる科学。彼らは亡霊的な言語から、大多数の利益のために、世界を少しずつ統御する。当の大多数は、告発してもむなしい愚かさのために、逆のことを信じているにもかかわらず。われわれが囚われている途方もない混乱への、もっとも優れた答えは、この文化のすべてを通じて与えられる。われわれを養い、同時に生を終わらせると脅かす羊水を通じて。

存在するすべて、そしてもっとも重要なのは、存在してきたすべてを包摂できる、より高度な数学を通じて、人間は、大きな傾向と呼ばれるこの大きな檻に触れることができるだろう。歴史学こそ、この大きな再構築を組織するよう求められる分野である。ここで再構築について語るのは、人間の歩みを通じて存在してきた破壊の諸形態を終わらせることが懸かっているからだ。

人文学と精密科学の世界を結び合わせる役割を、相当程度まで担わねばならないのは、歴史家である。とりわけどちらかの専門家となるのではなく、それぞれに片足を置き、導くために。もしそのような言葉が、なお恥じることなく口にできるならば。いずれにせよ、それこそが根本的な考えである。導くこと。これが必要なのは、課題が巨大だからだ。あまりにも巨大なので、今日われわれがそれについて理論化できることのかなりの部分は、きっとまもなく問い直されるだろう。大筋においてというより、技術的な細部において。

われわれがなるもののかなりの部分は、高度な技術、とりわけ人工知能の発展に大きく依存するだろう。多くのことができる機械。だが、これこそ歴史家としてもっとも関心のある点だが、根本的には、われわれ自身が提供しうるものとは根底から異なる、存在するものを包摂する方法を設計できる機械である。内容を妨げないかぎり、形はさほど重要ではない。不変に保たれねばならないのは、後者なのだ。われわれにまだそれを見分けるすべがあるとすれば。

したがって、技術が与えるすべての道具を用いて、人間の発展の傾向に光を当て、傾向以上の何か、もしかすると歴史の意味についての何らかの手掛かりを見いだせるかどうかを見るよう求められるのは、現在と未来の歴史家である。もちろんわれわれは移行の瞬間におり、非常に強力な技術的変化を経験している。それは一瞬で、われわれの視点を根底から変えうる。われわれは、いかなる直線的な発展のなかにいるのでもない。いくつもの方向が入り混じり、不注意な観察者を容易に混乱させるからだ。

われわれが人間と呼ぶものを露呈させ、あるいは構築する徴を追跡しなくてはならないのは、傾向のなかにおいてだ。よりよい予後を待つあいだ、われわれは機器とともに閉じこもり、かろうじて有効な信号があれば、その受信を始める。それは他の観念のなかの一つであり、黒い太陽のように黒い中心を持つ。

IV. 生まれることをやめる

したがって歴史家の課題は、もしそれが彼らの課題であり、単に習慣からそう名づけているだけでないなら、大きな再構築を遂行するための地図を構築することとなるだろう。それはわれわれを世界という観念の破壊へと導き、あらゆる現実が同時に存在することの受容へと実存を開くだろう。だが、これはいかなる静止も、永遠の救済といういかなる観念も受け入れることを意味しないだろう。すべては区切られ、われわれの文字どおりの世界システムの内に制約されるだろう。そこには固有の強みと、同時に無防備さもあり、後者は一般に、実存の可能性の次元性に関する事柄において現れるだろう。

記憶という観念もまた、意味を与え直されるだろう。それはもはや、何らかの仕方で世界を経験し、その同じ経験を通じてパターンを蓄え、あとになって多かれ少なかれ再利用し、あるいは単に再経験しうる者に固有の現象ではなくなるからだ。これらすべては、何が歴史であり何がそうではないかという、伝統的な領域あるいは観念を拡張する。

これはとりわけ示唆的だ。歴史学が何かにかかわるとすれば、それは過去の出来事を可能なかぎり忠実に説明すること、そして過去の到来を引き受けるよう現在を準備する、ますますよい方法にかかわるだろう。ある意味で、時間の観念の反転が起こるだろう。人はつねに、過去を後ろにあるものとして、未来を前にあるものとして語る。

人間と非人間の歴史家の課題は、確かに大きな地図の構築に限られはしないだろう。少なくとも最初の段階では、それが疑いなくもっとも重要な課題であるにしても。未来の法の実践に関しても、彼らは根本的な存在となるだろう。何しろ、本質的に裁判官の判断に基づく法の観念は、あらゆる紛争や裁判で裁かれうる状況で何が起きたかを精確に可視化することを可能にしようとするシステムによって、大規模に置き換えられるだろうからだ。おそらく、この展望を性急に喜ぶべきではない。

したがって歴史は、これからの時代に、少なくとも混乱したシナリオを経験し、データの不安定な収集と解釈にもっぱら捧げられた実践として歴史を理解する観念を、ゆっくりと、だが体系的に捨て去ることを強いられるだろう。あらゆる人文学が同様の変化を経験するだろう。すべてが少しずつ、論理と数学では包摂不能だとされるある謎や問いという観念だけに、それらを基礎づける視点を変えていくだろう。

われわれは、世界の真の脱魔術化を生きるだろう。だが、その帰結は、保守的な精神が予見するものとは大きく異なるだろう。あるアウラ、ある闇にいまだ囚われている多くの現象を覆うヴェールが、そのあらゆる細部において露わになるだろう。それは、俗な精神が信じるように、これらの現象が何かを失うことを意味するのではない。むしろ、それらを通じてはるかに深い享楽を、そしてこの通過の向こう側でもなおその言葉が当てはまるなら、究極にははるかに人間的な享楽を経験する機会なのだ。

したがって、懸かっていることのかなりの部分は、生成の火鉢に火をつけ、動物全体を煮立たせ、思弁のためのいかなる余地も残さないことである。